

たいら きんこう ふ こうしんじつさん ま やけい
大楽金剛不空真実三摩耶經

弘法大師こうぼうだいしこうかい空海が弟子達に常用（いつもお唱え）するように指示しておられた經典に『般若理趣經』ほんにやりしゆきやうというお經がある。正式なお經の題名は『大楽金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』たいらくこんごうふうくうしんじつさんまきやうほんにやはらみたりしゆほんといい、お經としてはかなり古く、密教が伝わる以前からある經典で、サンスクリット（インド）やチベット語の經典も残っている。日本の真言宗では中国唐代の大広智だいこうちふうくうさんぞう不空三蔵が漢字に訳された經典を使用しており、今日、法事やお葬式には必ずお唱えする。しかし、一般的には『般若心經』ほんにやしんぎやうほどには知られてはいない。どちらも膨大な「般若經」という經典群（漢字に訳されたものだけでも六百巻以上）に属し、「空」という仏教の根幹を扱っている經典である。特に『般若理趣經』はその中でも真言宗の最重要經典として特筆されている。理由は、經典の中で「これを書写し、読誦し、思惟すれば、無量の重罪があつたとしても、必ずその罪をあがなうことができる（救済）」と繰り返し述べられていることにもよる。

その内容はと申せば、これが、なかなか深秘じんび（奥が深く靈妙不可思議）なものがあり、真言の弟子ですら、うかつに解釈を下してはならないと厳しく諫められるほどのものがある。それゆえ、日常読誦されても、その意味は？となると、よほどの大阿闍梨だいあじやりでないとお話できなことになる。これは宗教的信仰上の問題もさることながら、いわゆる經典研究に学問的解釈上の問題が大きく関与している。特に真言宗はサンスクリットをぶつだによらい仏陀如来の真実の**ことば**（真言）としてそのまま伝承いたすことを旨としているので、なおのこと秘密めいてしまっている。

だが、私どもが、せつかくこの世に生を頂戴して、この『般若理趣經』を知らず人生を終えることは実にもったいない！また、この經典に流れる「空（本初不生）」くうほんぞふじやうと「大悲胎藏（慈悲）」だいひたいぞうの仏心こそわれわれの本質であるから、これを知らずして人類の未来はない！

私は幼少の頃より、ある志しを立てて僧侶の道のご縁を頂いてきたのだが、しかし、人生には思いも掛けぬ落とし穴があつて、自分の至らなさと思ひよりに、取り返しの効かない大罪を犯してしまったことがあつた。その罪はいまでも死罪を持ってしても決してあがないきれぬものではなかつた。本来であれば、こうして書いていること自体許されるほどのものは微塵持ち合わせていない者なのだ。まして、真言の阿闍梨などとの面下げていえるのか！。自らの罪を知れば知るほど奈落の底にある苦しみよりもなお苦しい。苦しいと思うことすら許されぬ、その罪という事実の前に、これまでの自己の意義は木っ端微塵に吹き飛んでしまったのである。他の誰が許して下さることはあつても、自分自身を救せなかつた。

そういえば、最近出た『ZEN』という映画のなかで道元禪師どうげんぜんじがもっとも信頼を寄せて、**「典座」**てんざを任せていた弟子が、修行中に罪を犯してしまい、弟子はその罪の重さに耐えきれず、道元禪師に願ひ出て、このような自分がいてはお山に迷惑がかかると、自ら山を下りることを願ひ出た。しばらく見守っておられた禪師は「まだ鬼は去らぬのか？」と尋ねられる。他の兄弟子たちは見かねて、その弟子に「去つたと申し上げよ」と進言するのだが、弟子はただ涙をこぼし、お救し下さいと低頭するのみであつた。袈裟と法衣と鉢を残し、山門を下りる、遙か彼方の愛弟子にむかつて、禪師は「永平寺はいつでも開かれておるぞーっ」とお声を掛けられる。そのようなシーンがあつたが、その弟子の心が痛いほどよくわかる。そして道元禪師のお言葉が痛いほど胸に響き、私自身思わずその場で慟哭

してしまった。

そのように、いかんとも度しがたい自分有的时候、ふと、『般若理趣経』の次の一説にであった。

所謂妙適清浄句是菩薩位。慾箭清浄句是菩薩位。觸清浄句是菩薩位。愛縛清浄句是菩薩位。一切自在主清浄句是菩薩位。見清浄句是菩薩位。適悦清浄句是菩薩位。愛清浄句是菩薩位。慢清浄句是菩薩位。莊嚴清浄句是菩薩位。意滋澤清浄句是菩薩位。光明清浄句是菩薩位。身樂清浄句是菩薩位。色清浄句是菩薩位。聲清浄句是菩薩位。香清浄句是菩薩位。味清浄句是菩薩位。何以故。一切法自性清浄故。般若波羅蜜多清浄。金剛手。若有聞此清浄出生句般若理趣。乃至菩提道場。一切蓋障及煩惱障法障業障。設廣積習必不墮於地獄等趣。設作重罪消滅不難。若能受持日日讀誦作意思惟。即於現生證一切法平等金剛三摩地。於一切法皆得自在。受於無量適悦歡喜。以十六大菩薩生。獲得如來執金剛位。

(い^みわゆる^き妙^{しやうじやう}適^{じやうじやう}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句はこれ菩薩の位なり。欲^{よく}箭^{せん}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。觸^{じふ}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。愛^い縛^{じやく}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。一切自在主^{いつさいじざいしゆじやうじやう}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。見^{けん}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。適^{じつ}悦^{えつ}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。愛^い清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。慢^{まん}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。莊^{じやう}嚴^{げん}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。意^い滋^し澤^{たく}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。光^{くわう}明^{めい}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。身^{しん}樂^{らく}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。色^{しき}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。声^{せい}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。香^{かう}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。味^み清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}の句これ菩薩の位なり。何を以ての故に。一切法は自^じ性^{じやうじやうじやう}清^{じやうじやう}浄^{じやうじやう}なるが故に般若波羅蜜多是清浄なり。

金^{こん}剛^{ごう}手^{しゆ}よ、若しこの清浄出生句の般若理趣を聞くこと有らば、乃し菩提道場に至るまで、一切の蓋障、及び煩惱障、法障、業障など設い広く積集するも必ず地獄等の趣に墮せず、設い重罪を作るとも消滅せんこと難からず。若しよく受持して日々に読誦し作意思惟せば、即ち現生に於いて一切法平等の金剛の三^{さん}摩^ま地^ぢを証して、一切法に於いて皆自在を得、無量の適悦歡喜を受け、十六大菩薩生をもつて如來と及び執^{しゆ}金^{こん}剛^{ごう}の位を得べし)

仏の胸に いだかれて 妙^た適^えなるめぐみ 身に沁みつ ふかき慈悲に つつまれる われを知る
こそ 菩薩なれ すくい求むる 慾の箭は やがて接取の み手に触れ きよき慈愛に つながれて
おもいのままに 生きてゆく まこと仏を見ることも 仏に触れる 適^{よろこび}悦^びも いやます愛は なおさ
らにきよき慢となりぬべし 仏の智恵に かざられてころはとわに 滋^{うるほ}沢^ほえり み光のもと 身は
つねに 楽しからぬは なかりけり 眼に見る色は 仏なり 耳に聞く音は 仏なり 鼻に嗅ぐ香は
仏なり 舌に嘗む味 仏なり それはなぜにと たずぬれば すべてのものは そのままに いずれ
も浄き ものならば もしその性に 目覚めれば きよき悟りの 彼の岸に 到れる真実 そこにあ
り}

この一説に触れて、不覺にも滂沱たるを禁じ得なかつた。

紙面の都合上、これ以上は遠慮したいが、生涯を掛け、『般若理趣経』に触れつつ、人生の探究を深めていきたいと切に願っている。この尊い「心の通信」の読者に対し、この『理趣経』に触れていただく機会になればと稿を起し始めた。お許しただければ、時折、この『理趣経』を取り上げてみたい。

萬歳樂山人 龍雲好久